２０２３年度明治大学教育会研究大会 分科会概要

第１分科会
「個」を強くする博物館―博物館からひろがるＰＢＬと「対話」の世界―

田中　則仁　先生（日本学園中学高等学校）
小野塚　美保　先生（日本学園中学高等学校）

〔発表場所〕明治大学駿河台キャンパス
〔発表概要〕

昨年度、「歴史総合」を「プロジェクト学習」（ＰＢＬ）化するための理論と実践について発表を行いました。今年度は、それがどの教科においても応用することができるということを示すため、「総合的な探究の時間」におけるプロジェクトについて考察します。その際注目したのが、（美術館や動物園、水族館などを含めた）「博物館」の持つ教育力です。

2023 年「広島サミット」における「核軍縮に関するＧ７首脳広島ビジョン」やウクライナのゼレンスキー大統領の「人影の石」演説に大きな影響を与えたのが「広島平和記念資料館」です。被爆者の多くがこの世を去り、原爆に関わる記憶が薄れつつある中、過去の歴史を、現代を生きる人々が博物館に収蔵された史資料を通して学び、未来の平和に対して働きかけるというその構図は、博物館の持つ教育力の偉大さを示したものだといえます。ＩＣＯＭ（国際博物館会議）においても、「持続可能な社会」形成のために、積極的な役割を果たす博物館、そして博物館学芸員の姿が示されるなど、主体的な教育の場としての博物館、の姿は従来以上に注目を集めています。

今回の発表において、博物館をその持つ教育力を最大限に引き出し、「第二の教室」（田尻、2016）としてプロジェクトの中で活用する手法の確立を目指します。その際、博物館に関わるステークホルダー（博物館学芸員、教職員、そして生徒）がそれぞれ「ミュージアム・リテラシー」や、“「個」を強くする大学” 明治大学博物館の持つ強みも明らかにし、ＰＢＬにおける活用例として示します。

１　研究の背景と目的
２　研究の理論と方法
３　プロジェクトのデザイン

４　展望と課題
＜キーワード＞
　社会構成主義　社会改良主義　ミュージアム・リテラシー　ＰＢＬ（プロジェクト・ベースド・ラーニング）　学びの三位一体論　「問い」の構造化　「フォーラム」「アゴラ」としての博物館

第２分科会
クリエイティブな数学教師に求められる経験とは何か？

佐藤　英二　先生（明治大学文学部）

〔発表場所〕明治大学駿河台キャンパス
〔発表概要〕
　数学教師が、学校のさまざまなルーチンワークに慣れたうえで、それにとどまらずに、従来の授業の枠を超えるクリエイティブな授業者になっていくためには、どのような経験が必要なのだろうか。ここでの授業者の創造性にも、教材開発の創造性、生徒の学びを見る繊細さ、授業展開の先を見通す目など、多様なものが予想される。また、クリエイティブな教師に成長する道筋も一つではないだろう。そこで今回は、経験豊かな３人の教師と教職課程の教員のコラボを通して、この問題について考えたい。現職教師として菅達徳先生（明大中野中高、会員）、島智彦先生（神奈川学園中高、非会員）、清水慶太先生（帝京中高、非会員、同窓生）が参加し、教職課程から佐藤が参加する。なお、題材は中学校・高等学校の数学を取り上げる可能性があるが、教師の成長に関心を持つ方であれば、参加者の免許教科は問わない。

第３分科会
今、求められる教員の資質・能力とは～距離と空間をこえた学びの実践～

永井　崇　先生（福島市教育委員会学校教育課）
小田　和也　先生（新潟県佐渡市立高千中学校）
根本　太一郎　先生（福島県双葉郡楢葉町立楢葉中学校）

〔**発表場所**〕明治大学駿河台キャンパス
〔**発表概要**〕

1　今、求められる教員の資質・能力

教員不足が叫ばれる今日、教員採用試験の平均倍率が小学校では２倍を切り、地域によっては 1.2 倍という現状に陥っている。中学校においても近いうちに３倍を切ることが予想される。その代償として、教員の指導力の低下が原因による学力の低下、あるいは、教員の指導力に起因する子どもたちの不登校・いじめ、学級崩壊等の増加が目立つ。一方で、念願叶い教員として出発したものの、学校現場における課題等の現実に直面し、疲労感や挫折感を抱き、離職する新採用教員等が目立つ。今回の発表では、学校現場での教員の働き方の現状や課題等を明らかにし、その上でその課題を解決するための一助となるような提案をしたい。

2　Beyond distance project～距離と空間を超えた教師の学びの実現について～

2022 年６月、小田・根本両教諭で Beyond distance project のプロジェクトを立ち上げた。社会科の指導力の向上、授業スキルの改善、指導実践の共有を中心に学級経営や働き方改革、家庭と仕事のバランスのとり方など、多様な視点から「教員としてどうあるべきか」問い直し、オンラインを中心に月１～２回程度話し合ったり、ＳＮＳを活用したりして情報共有を行っている。両名とも、教員として正式採用になり、それぞれ６・７年目が過ぎ、日々教師としてどのように学び、成長し続ければよいか試行錯誤している。その中で得た気づきや学びについて今回提案や紹介をしたいと思う。

第４分科会

総合探究の授業実践・外部と連携した課外活動ベース「千羽鶴」の活動

酒井　徹　先生（岩倉高等学校）

〔**発表場所**〕明治大学駿河台キャンパス
〔**発表概要**〕

【自己紹介】地理の教員になるために、大学卒業後、旅行会社で４年間添乗や企画等の実務を経験。社会科主任などを経て総合探究科

主任となり、課外活動ベース「千羽鶴」を立ち上げる。
【目標】社会とつながっている学校のもと、日本の高校生が「経験」を通して、勉強や生活に目的意識を持てる新しい育成環境のデザイン
【総合探究の授業（テーマ：SDGs）】
１年次：７企業・１団体と連携した授業を展開
（目的）SDGs を通して、進路選択の材料を得る
２年次：９つのステップの起業プログラム
（目的）SDGs を通して、新しい価値を創造する
３年次：株式学習を中心とした金融・経済教育
（目的）ESG 投資など、SDGs への関わり方を学ぶ
【課外活動ベース「千羽鶴」】
企業やＮＰＯなど、外部と連携した短期・長期のプロジェクトを生徒主体でおこなう任意の課外活動
（例）月に１度のカンボジア交流会・茨城県古河市長への地域創生案提案・100 円ショップ商品によるケニアのお母さん支援・障がい者支援＆農業体験プロジェクトなど
入退部にこだわらない組織のなか、失敗を恐れずに挑戦し、「経験＝成長」に気づき、行動力を身に付ける。また、部活動を退部したり、学校に固定された活動に興味関心がない生徒が学校に活動拠点が持てるように、校内セカンドチャンスの位置づけでもある。
【今後の展望】「経験」を軸とした生徒の育成環境　→　教員の人事育成制度、学校の組織づくり

第５分科会
「特別支援教育」を考える―特別支援教育支援員の経験から―
平等　香奈子　先生（東京大学大学院教育学研究科修士２年）

〔発表場所〕明治大学駿河台キャンパス
〔発表概要〕
2022 年に文部科学省が行った通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する教師アンケートでは、小学校・中学校の通常学級において学習面及び行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が 8.8%と推定されてい

る(文部科学省初等中等教育局特別支援教育課, 2022)。しかし、現場の教師からは通常学級での特別支援教育へ困難を感じることがあり(笠島・石川, 2022)、どのように特別支援教育を行っていくのかは喫緊の課題である。

今回は通常学級で行われている特別支援教育の一つである、“特別支援教育支援員制度”に着目する。発表者は公立小学校・中学校で特別支援教育支援員を経験しており、活動内容や経験を通して得られた気づきについて提案や紹介を行う。なお、本制度について、2007 年から設置された制度でありつつも先行研究が乏しい分野であるため、研究動向や今後の動向についても併せて紹介する。

以　上